

## [論文]

## 『エミール』の教育思想

山口拓夢

## はじめに

ジャン＝ジャック・ルソーの『エミール』は、もし、できるとすれば、子どもはこう育てるべきだ、という架空のうえでの理想の教育を論じた書である。それゆえ、現実の制約からかなり自由な、あり得ない形の教育論が展開されている。ルソーという自由な思想家が、多分に自分のユートピア的人間像をエミールという架空の教え子に託して語った教育思想である。そこにはルソーの世界観、人間観が深く横たわっている。

ルソーが体系的に自分の人間観を述べ始めたのは、『人間不平等起源論』からである。それは、社会制度以前、すなわちお互いのもたれかかりによる不平等の生まれる前の自然状態をまず設定し、人の抱え込むことになる矛盾の諸段階を確かめつつ、その矛盾の帰結として、同時代の文明を描き出すという手順で書かれた。自然状態からの離脱は、原点からの脱線であり、ルソーはあらゆる不幸をそこに見ている。

原初の自然状態は無垢であり、文明の発展に従って支配・被支配の不平等は極度に達するという文明批判の考えがルソーにはある。その根本的な姿勢は『エミール』という教育論では表向き伏せられているが、『エミール』の通奏低音として全編を支えている。

自然状態は無垢であり、社会の掟は人間の最善の発明ではあるけれど、自然人にとっては足かせであるであるというパラドックスが、彼の『社会契約論』にもついて回る。その事情は『エミール』でも変わらないのだが、『エミール』は想像上の先生と教え子の、あるべき姿をあらかじめ選び取っ

ているので、理想の教育像を思う存分自由に語っても、前提となる矛盾は美しく回避されている。

無垢であるはずの人間が、次善の策として、他人と自立共存しつつ社会の足かせを甘受することがルソーの抱えた難問である。ルソーは『エミール』という架空の教育の場でその打開点を見出し、ルソーにとっての希望の生活世界を提示することができた。そうしたルソーの「あるべき答え」がこの『エミール』には込められている。その意味でルソーの教育論はルソーの思想全体の鍵を握る著作でもある。空想の翼を自由に伸ばしているのも、その望む人間観、世界観を余すところなく語り尽していると言える。

民主社会の形成に決定的な方向性を与えた思想家であるルソーの語る教育論は、多分に空想的であることを差し引いても、人格形成の望ましい姿を考えるうえで、現代社会でも重たい意義を持っている。

私はこの論考で、最初にルソーの子ども観の特徴に光を当て、次に子どもが学ぶべきものは何かを取り出し、さらにルソーの教育の理想である都会の自然人が学ぶべきこととは何かを考え、最後に『エミール』と社会性を考えて、その教育思想を現代に生かす術を探ることにする。

## 第一章 子どもとは何か

アリエスの『子供の誕生』では、中世西洋社会が、子どもという明確な概念を持っていなかったことが論じられている。

「中世において、また近世初頭には、下層階級のもとではさらに長期にわたって、子供たちは母親ないしは乳母の介助が要らないと見なされるとただちに、すなわち遅い離乳の後何年もしないうちに、七歳位になるとすぐ大人たちと一緒にされていた。この時から、子供たちは一挙に成人の共同体の中に入り、老若の友人たちと共に、日々の仕事や遊戯を共有していたのである。」

(アリエス著『子供の誕生』邦訳 p.384)

近代において、事情は一変する。

子ども問題に関して、「家族の感情、階級の感情、そしておそらく他のところでは人種の感情は、多様性にたいする同一の不寛容さの表明として、画一性への同一の配慮の表明として、出現するのである。」(同書、p.388)

子どもは長い歴史のなかで、独自のモラル・固有の感情をもつ実在として見られたことはなかった。子どもの囲い込みという視点は、ミシェル・フーコーの管理社会論と同じ方向性を持っている。

「この問題の関心は『狂気の歴史』や『監獄の誕生』におけるミシェル・フーコーのそれと方向性を同じくしている。つまり、他の種類の人間関係から区切られた近代的家族が確立されてくることは居住空間や市街の配置の変化と深くかかわっているのだが、そのことは古い社会に存在していたきっちりとは規定されていないある空間、それゆえ社会をなんらかの透明でなくしてくれる空間をとりのぞいてしまった。いいかえると、近代の社会は、居住空間や市街の構成と閉鎖的な近代的家族とによって、穏和な仕方ではだが、権力の関係によって枠組みがつけられてしまっている。私生活化が管理の強化をとまなうのはその理由によるものなのである。」 (同書、訳者あとがき p.393-394)

混沌とした老若男女の明るい集団生活の中で、小さな大人としてしか見られていなかった子どもが、近代の管理社会の囲い込みによって矯正されるようになった、というのがアリエスの子ども囲い込み論の主旨である。

だが、中世にはなかった子どもの発見は、必ずしも否定的な事実ではない。今野一雄は、教育における「子どもの発見ということが教育思想におけるルソーのもっとも大きな功績だといわれている」(ルソー著『エミール』解説 p.6) と明言している。ルソー流の子ども発見と教育論は、アリエスの批判する子どもの管理矯正ともっとも遠いところにある。

「人間はよい者として生まれているが、社会は人間を墮落させる。」

これがルソーの根本命題です。ですから、教育においても、子どもを自然の発育にまかせ、教師はただ外部からの悪い影響をふせいでやる、これがルソーの方針です。」（同書解説 p.6）

ルソーの子ども観は自然を生かす方を向いていて、社会による管理矯正とは真逆の教育を説いている。子どもの概念の発見が、そのまま中世的雑居から家庭でのきつい躰や寄宿舎の囲い込みに繋がるといような単線的な構図では捉えきれない、文明の悪弊を免れている自然的人間としての子どもの領域の発見がルソーの功績と考えられる。

これから具体的に『エミール』に見られるルソーの子ども観を取り上げて行くことにする。まず子どもの原初段階について、ルソーは書いている。

「子どもが最初に感じる感覚は、純粹に感情的なものだ。子どもは快、不快をみとめるにすぎない。歩くことも、物をつかむこともできないかれらは、長い時間をかけて、すこしずつ、かれら自身の外にある物体を示してくれる表象的感覚を形づくる。しかし、それらの物体がひろがり、いわばかれらの目から遠ざかっていき、大きさや形が見えてくるまでに、効果的な感覚のくりかえしが子どもを習慣の力に従わせることになる。（中略）やがては欲求がもはや必要から生じないで、習慣から生じることになる。というより、自然の欲求のほかに習慣による新しい欲求が生じてくる。そんなことにならないようにしなければならぬ。」（ルソー著『エミール』今野一雄訳、上巻 p.72）

ルソーは長年の子どもの観察から、今日でいう発達心理学的な見方を獲得している。しかしながら、その原初段階の子どもの状態は、ジョン・ロックの考える、生まれつき持つ観念は何もなく、白紙の心に感覚が刻むという経験論のタブラ・ラサ（「何も書かれていない板」）の状態から着想を得た見方のように思われる。白紙の心に感覚的経験が蓄えられ、成長の第一歩が始まる。けれども、できるだけわがままではなく、自然の欲求だけを

満たすことで足りることを知らなくてはいけない。

五十嵐良雄はルソーの発達心理学的な見方の要点を次のようにまとめている。

「ルソーは、『エミール』を通して、後世の発達心理学の基礎を切り開いた。あるいはまた、アンリー・ロワンも指摘しているように、人間の発達の科学的研究の先駆者であると言われている。それは簡単に言えば、子どもの成長発達の過程を、子ども独自の、子ども固有の成長段階を経るものがあるとして、次のような三段階論を主張したことに起因している。まずこの世に生を受けた瞬間から、造物主によって賦与されている感官＝感受性を持ったものとして人間は生きるものであるということ。つまり感官を刺激するものを通じて、人間としての人間形成の第一歩が始まるのだということ。この時期の人間を感性的存在として把握したこと。快・不快しか感じない存在として、その快・不快を通じて、初めて外界とかかわる人間として存在する。」

(五十嵐良雄著、『J』ルソーの教育論』 p.97)

ルソーは言う。

「わたしたちがわたしたちとは別のものがあることを学ぶのは、運動によってにはかならない。また、わたしたちが空間の観念を獲得するのは、わたしたち自身の運動によってにはかならない。子どもが、すぐそばにあるものでも、百歩さきにあるものでも、差別なしに手をだして、それをつかもうとするのは、空間の観念をもたないからだ。子どもがそういうことをするのは、支配欲のしるしのようにみえる。物にこっちへこいと命じたり、ひとにそれをもってくるように命じたりする、命令のようにみえる。しかし、それは全然ちがう。それはただ、子どもがまず頭脳において見、ついで目で見える物体が、いま手の先に見え、そして子どもには、手の届くかぎりの空間しか考えられない

いからだ。だからときどき子どもを動かしてやるようにするがいい。」

(同書、上巻 p.75-76)

個物の認識、空間の認識は動いて触ってみることで得られる。これも、ロック流の経験論とルソーの子どもの観察の結果生まれた知見である。

ルソーは人間とはよい者として生まれているが、原初状態では何も持たず、感覚的経験の積み重ねですべてを学んで行くと説く。仮にアリエスの言うように中世には子どもの概念が実質的になかったとすると、ルソーは熱心な子どもの観察から、子どもが生きている世界をたどり直し、子ども独自の領域を改めて「発見」したのだと言えるかもしれない。それは子どもを振り分けて囲い込むための区分けではなく、子どもの領分を見極め、自然の道から外れないように見守り、最低限の手助けをする眼差しであった。

子どもの有り余る破壊力について、ルソーはこう言っている。

「自然をつくった者は、子どもにそういう活動源をあたえると同時に、それがあまり有害なものにならないように注意をはらい、子どもにあまり大きな力をあたえないで活動させている。(中略) 子どもはよけいな力をもっているところではない。自然がもとめることをみだすのに十分な力さえもたないのだ。だから、自然によってあたえられたすべての力、子どもが濫用することのできない力を、十分にもちいさせなくてはならない。第一の格率。肉体的に必要なに属するあらゆることで、子どもを助け、知性においても力においても子どもに欠けているものをおぎなってやらねばならない。第二の格率。子どもを助けてやるばあいには、じっさいに必要なことだけにかぎって、気まぐれや理由のない欲望にたいしてはなにもあたえないようにすること。気まぐれは自然から生ずるものではないから、人がそれを生じさせないかぎり、子どもがそれになやまされることはないのだ。第三の格率。子どものことばと身ぶりを注意深く研究して、いつわることのできな

い年齢にある子どものうちに、直接に自然から生ずるものと臆見から生じるものを見わけなければならない。第四の格率。』

(同書、上巻 83-84)

物を壊すのは理由がなく、幼児は無力であるから助けを必要とするけれど、それは自然の欲求に限り、自然に由来しない不自然な欲求を助けてはいけなるとルソーは強調する。「自分の欲求を自分の力の範囲に限る」ことに慣れさせるためである。この考えはルソーの考える自由の核心として、この『エミール』という著作を貫いている。そこに過保護や甘えの余地は残されていない。

けれども子どもが生きる喜びを感じることができるようになれば、その喜びを思う存分味合わせることをルソーは勧める。

「人間よ、人間的であれ。それがあなたがたの第一の義務だ。あらゆる階級の人にたいして、あらゆる年齢の人にたいして、人間に無縁でないすべてのものにたいして、人間的であれ。人間愛のないところにあなたがたにとってどんな知恵があるのか。子どもを愛するがいい。子どもの遊びを、楽しみを、その好ましい本能を、好意をもって見まもるのだ。口もとにはたえず微笑がただよい、いつもなごやかな心を失わないあの年ごろを、ときに名残惜しく思いかえさない者があるろうか。(中略) 子どもが生きる喜びを感じることができるようになったら、できるだけ人生を楽しませるがいい。いつ神に呼ばれても、人生を味わうことなく死んでいくことにならないようにするがよい。」

(同書、上巻 101-102)

ルソーは罰と脅しを与えるのではなく、二度と戻らない幼年期に子どもを幸せにするように説く。この充足感が、その先を生きるための自己肯定感を支え、後悔の残らない記憶を与える。ただし、あるべき欲求を満たすことに努め、競争心や妬みや羨ましがりから子どもを守る必要がある。

ルソーの考える子どもとは、独自の経験世界の領域を持ち、感覚によって生まれ、自然な欲求を満たすことで生きる喜びを味わう、幸福な時間を過ごす始源児である。大人は自然な欲求にかぎり、それを満たす手助けを与える。ルソーの「子どもの発見」とはそのようなものであり、管理社会の矯正へと連なる系譜ではないことに注目したい。

## 第二章 子どもが学ぶべきものは何か

前章では、ルソーの基本的な子ども観を概観したが、この章では理想的な教育で教え子が学ぶべき内容は何かを検討したい。田舎育ちの教え子エミールが畑仕事に興味を持つと、物を自分のものにするという意味をまず教えるべきであると、ルソーは説く。なぜ率先して物を持つことの意味を悟らせるのだろうか。

「そこで所有ということの起源にさかのぼることが問題となる。そこから最初の観念が生じてくるはずだからだ。子どもは、田舎で生活しているので、田園の仕事についてすでにいくらか知識をもっていることになるだろう。そのためには目とひまがあれば足りるのだが、子どもにはそのどちらもある。創造し、模倣し、生産し、力と活動のしるしを示すことは、あらゆる年齢の人の望むところだし、とくに子どもの望むところだ。畑をたがやし種をまく、野菜がのび成長する。そういうことを二度と見ないうちに、子どもは自分でも畑仕事をやってみたくなるだろう。」  
(同書、上巻p.142-143)

労働の成果としての生産物の所有を人間の営みの根幹としてルソーはとらえ、はたらくことの喜びが人生を作ることを真っ先に学ぶべきだと考える。そこにはまだ搾取の制度の入り込む余地はない。与えられたおもちゃと違って、作物は物を持つことの原理を端的に示す。それは権利の生きた実例である。



「わたしたちは毎日そら豆に水をやりにくる。そら豆がのびてくるのを見てうれしくてたまらない。わたしは、これはあなたに所属するものです、と言ってかれの喜びをさらに大きくする。またそのとき、この所有するということばを説明して、わたしは、かれがそこに時間を、労働を、労苦を、要するにかれの体をついやしたこと、その土地にはかれ自身に属するなにものかがあるのであって、相手がだれであろうとかれは断固としてそれを要求できる、それは、ちょうど、かれがいやがるのにひきとめようとする他人の手から自分の腕をひきぬくことができるのと同じことである、ということをはからせる。」

(同書、上巻 p.143)

権利の発生の実例をそら豆で説明するのは、自由思想家ルソーのユニークなところだ。そして、その権利が、かれが嫌がるのに引き止めようとする他人の手から自分の腕を引き抜くことができるのと同じだと言うこと、すなわち権利と自由は等価だということを平易に表現するルソーの具体例の的確さは比類のないものである。自由を嫌なときに腕を引き抜くと言い換える辺りが、ルソーの教育論の底力であると言える。

本格的な学びの時期として、思春期のすぐ前に、本来の教育の時期が訪れる。エミールはものの道理だけでなく、有用な知識を身につけ、善悪の区別を心得るようになる。知識欲のきっかけは好奇心だが、それが自然に由来するものに向かうように導かなければいけない。ルソーはこの時期について述べている。

「青年期に達するまでの人生の期間ぜんたいは無力の時期だが、この最初の時期のあいだに、力の発達が欲望の発達を追い越して、まだ完全に無力ではあるが、成長しつつある生物が相対的に強くなる時期がある。かれの欲望はまだすべてが発達していないので、現実の力はかれが感じる欲望をみたしてなおあまりあるものとなる。人間としてはかれはきわめて弱い存在だが、子どもとしてはきわめて強い存在と

なる。(中略)十二歳ないし十三歳になると、子どもの力はその欲望にくらべてはるかに急速にのびていく。もっとも激しい、恐ろしい欲望はまだかれのうちには感じられない。その器官もまだ未完成の状態にあつて、そこから抜け出すために意志によって強制されるのを待っているかのようにみえる。」(同書、上巻p.283-284)

この時期の重要性について、今野一雄は解説のなかでこう説明している。

「子どもが十二、三歳になって、いろいろな事物について知識を修得することになっても、教師はそれを教えてやってはいけない。生徒が自分でそれをみいだすのを助けてやるだけにしなければならない。社会関係、倫理、宗教、といったようなことは理性が十分に発達したあとでなければ、十五歳を過ぎ青年期にはいったあとでなければ、一般的な説明をあたえてはならない、ということになります。」

(同書、上巻 p.6)

思春期の前で、青年期までの間、理解力も付き、体力も余って充実した時期に、子どもの吸収力は計り知れないほど大きくなる。だが高度に抽象的なことがらについては、後回しにしなければならない。教育は具体的なものに限られる。

「わたしたちの感覚を観念に転化しよう。しかし、感覚的な対象からいっぺんに知的な対象に跳び移るようなことはしまい。感覚的なものを通してこそわたしたちは知的なものに到達することになるのだ。精神の最初のはたらきにおいては、感覚がつねに精神の案内者となるようにしなければならない。世界のほかにはどんな書物も、事実のほかにはどんな授業もあたえてはいけない。読む子どもは考えない。読むだけだ。かれは知識を身につけないで、ことばを学ぶ。」

(同書、上巻 p.289)

自然界のしくみ、地理、物理、天文学、人と人との取り引きなどが実地教育で学ばれてゆくことを心掛けなければならない。そこでようやく、社会的な基礎知識もエミールの世界に入っていく。ルソーは言う。

「交換がなければ社会は存在しえないし、共通の尺度がなければ交換は存在しえないし、平等ということがなければ共通の尺度は存在しえない。だから、あらゆる社会には、第一の法則として、あるいは人間における、あるいは事物における、契約によるなんらかの平等がある。人々のあいだの契約による平等は、自然の平等とはまったくちがったもので、それは実定法を、つまり政府と法律を必要ならしめる。子どもの政治についての知識は明確で限られたものでなければならない。子どもは政府一般については、すでにいくらかの観念を持っている所有権に関連したこと以外には知るべきではない。」

(同書、上巻 p.335)

ついにここでルソーの根本思想である社会契約説が登場する。けれども必要以上に難しい話を子どもに説いてはいけない。

社会についての基礎知識として、物を自分のものにする、他人と物を取り替えること、そのためにお金が使え、取り引きには平等が必要ということ、社会での平等は約束にもとづいていることを子どもは学ぶことになる。

具体的な知識として、どう役に立つかの延長線上に、自然の世界と社会の約束とが、断絶なくうまく子どもに手渡される。人間の自然状態をよきものとするルソーが、社会の鎖に縛られることの葛藤はここでは問題にされず、自然の知識と社会の約束が生きていくために等しく必要なものとして教えられる。ここにルソーの望む自然と社会の均衡の取れた生活世界の視野が子ども教育という場を通して与えられている。社会契約のくわしい説明は教え子がさらに成長してから、教師との旅を経て後半語られることになる。ここでは大人になる前の子どもが学ぶべきものの範囲で社会契

約の大切さが、取り引きの平等との関わりでさりげなく告げられている。この部分に対するルソーの思い入れは並外れたものが当然あるのだが、子どもに役に立つことを等しく教えるという文脈の中で、ルソーの知見は思いやりに満ちたやり方で、子どもを不必要に惑わせないように生かされている。

### 第三章 都会の自然人が学ぶべきこと

『エミール』で語られている、ルソーの理想の生活人を考えてみると、それは都会の自然人であるという一点に行き着く。社会と自然の葛藤がルソーの取り組んでいる問題だということを私はこれまで幾度か力説した。そしてその葛藤がルソーの教育論では解決の糸口を提示しつつあることを、私は前章の最後で示した。自然世界のしくみと社会の約束が、有用な知識として等しく子どもに手渡されているからである。それは形を変えてルソーの理想として表現される。それが、都会の自然人である。

「わたしは自然から逸脱している、と人は言うだろう。わたしは全然そうは考えない。自然は道具を、そして規則を、意見にもとづいてではなく、必要にもとづいて選ぶ。ところで必要は人間の状況に応じて変わる。自然の状態に生きている自然人と、社会状態のうちに生きている自然人とのあいだには大きなちがいがあある。エミールは人の住まないところに追いやられる未開人ではなく、都会に住むようにつくられた未開人だ。かれはそこで必要なものを見つけ、都市の住民たちから利益をひきだし、かれらと同じようではないにしても、かれらとともに暮らさなくてはならない。」  
(同書、上巻p.369)

この人間像を五十嵐良雄はつぎのようにまとめている。

「自己が存在するという意識さえ持たない生理体として、この世に

生を受けた人間は、誕生と同時に、その時代の諸関係のなかに身を置き、またその国の国家の構成員の一人として一人で生きていくことになる。人間は決して孤立しては生存することができない。常に他者を必要として他者と共に生きる存在である。にもかかわらず、ルソーは、その中にあっても、自然人として生きる人間の形成を目指した。」

(五十嵐良雄著、『J.J ルソーの教育論』 p.87)

エミールは、実に、社会状態のうちに生きている自然人であることを期待されている。だが、そのためには、彼は生活の糧を学ばなくては行けない。ルソー本人が、都会の自由人として食べていくために、手に職をつけていた。それは楽譜を書き写す仕事である。そのためルソーはパトロンに依存することなく、フランス国王の年金も断って、執筆と植物採集と散歩に明け暮れる生活ができた。

エミールに職業を探さなくては行けない。

「わたしの息子に職業を！わたしの息子を職人に！先生、それは本気なのでしょうか。奥さん、わたしはあなたよりもずっと本気に考えています。あなたはご子息を貴族とか、侯爵とか、大公とかいうもの以外になれないようにしようとしていらっしゃる。そしてたぶんいつかは、なんにもならないものよりももっとつまらないものにしようとしていらっしゃる。ところが、わたしは、けっして失うことがない地位を、どんな時代にもかれを尊敬させることになる地位をあたえたいと思っている。わたしはかれを人間の状態にひきあげたいと思っている。そして、あなたがなんとおっしゃろうと、あなたから受けるすべての資格においてよりも、この人間という資格において、かれは自分と肩をならべるものをそう多くはもたないことになるでしょう。」

(『エミール』、上巻 p.349)

都会の自然人として生きるために、ルソーは自分が楽譜の書き写しを生業としたように、エミールを貴族のようではなく、手に職を持つ生活人として自立させなければならない。それは無垢なエミールが、誇りをもって、一人の人間として胸を張って生きるためである。ルソーは生業についてこう意見を述べている。

「わたしがあなたがたに求めているのはなんらかの才能ではないことを忘れないでいただきたい。それは一つの職業なのだ。ほんとうの職業なのだ。純粋に機械的な技術なのだ。頭よりも手を働かせ、大きな財産をもたらすことはないが、そういうものなしですませられる技術なのだ。」  
(同書、上巻p.350)

そしてルソーは生業として、時代の流れに左右されない、一人のできる職人的な仕事が最適だと主張する。最終的に都会の自然人エミールが学ぶのにふさわしいとされるのは何か。

「すべてをよく考えてみると、わたしがいちばん好ましく思う職業で、わたしの生徒の好みに合っていると思われるのは、指物師の職業だ。それは清潔で、有益で、家のなかで仕事をすることができる。それは十分に体をはたらかせ、職人の器用さと工夫を必要とし、用途によって決定される作品の形には、優美さと趣味も排除されていない。」  
(同書、上巻 p.360)

こうしてエミールは指物師となって、生きるのに最低限必要なものを身につけて、大人への一步を踏み出す。次にエミールに必要とされるのは、感情によって理性を完成させること、社会的な徳を必要としている関係を知ることである。私たちははいよいよ『エミール』第四編で、思春期以降の人間が学ぶべきことの領域に入る。

まず、『エミール』第四編では思春期の情念の目覚めが問題となる。エミ---

ルは恋愛よりは友情を、欲望よりも愛情を感じるように育てられることになる。

「青年の情熱は教育のさまたげになるどころではなく、それによってこそ教育は仕上げられ、完成されるのだ。青年があなたがたよりも力において劣る存在ではなくなったとき、それこそかれの心をつかむ手がかりをあなたがたにあたえるのだ。かれの最初の愛情は、それによってあなたがたがかれの心のあらゆる動きを導く手綱となる。かれは自由だったのに、いまでは服従することになるのだ。なんにも愛していないあいだは、かれは自分自身と自分の必要にしばられているだけだった。愛するようになるとすぐに、かれはその愛着にしばられることになる。こうして、かれはかれをその同類に結びつける最初の絆がつくられる。」  
(同書、中巻 p.67)

男女を問わず、身近な人への愛情の初歩が目覚める。それはやがては人類愛のような大きなものに至るのだが、それを急いではいけない。まずは何かをしてもらったことへのありがたさや友情の重みを知ることから愛情の扉は開かれる。

「わたしたちはやっと道徳的な秩序のなかへは行っていく。わたしたちは人間の第二の段階を経過したのだ。ここでそういうことを語るべきだとするなら、心の最初の動きから良心の最初の声が聞こえてくることの、愛と憎しみの感情から善悪の最初の観念が生まれてくることの証明をわたしはこころみたい。『正義』と『善』はたんに抽象的なことば、悟性によってつくられるたんなる倫理的なものではなく、理性によって照らされた魂がほんとうに感じるものであること、それはわたしたちの原始的な感情の正しい進歩の第一段階にほかならないこと、良心とかかわりなしに、理性だけではどんな自然の掟も確立されないこと、そして自然の権利も、人間の心の自然の要求にもとづく

のでなければ、すべて幻影にすぎないこと、そういうことをわたしは証明したい。」  
 (同書、中巻 p.72-73)

今まで注意深く思弁的なこと、徳や倫理のことを安易に語るのを避けてきたルソーは、思春期の良心の声の目覚めに至ってようやく正義や善について重い口を開く。それは発達した理性をもちはじめた魂がほんとうにリアルに感じる心の動きであり、自然の要求にもとづくものであることがはっきりと語られる。ここは哲学的な重みのある個所である。

カントは理性の命ずる声に従うべきだという義務論的倫理学を確立した。時計のように正確な時間に思索や散歩をしていたカントが、日課の散歩もそのときだけは忘れて、このルソーの『エミール』を食い入るように読んだというが、この箇所はカントの心を強く打ったことは疑いない。何らかの実体を考えることは現実的ではないが、道徳的な根拠づけのためなら、神や魂といった実体とされてきたものへの、人間の希求自体は認めるというコペルニクスの転回を成し遂げたカントが、理性の声を自然の要求と地続きのものとして、良心の自然な目覚めとして説いたルソーのこの部分を素通りできたはずがない。ルソーのことは、カントの関心の核心に触れていた。この道徳論の入り口は友人への共感と感謝である。

「ところで、人間の心にとっては、はっきりとわかっている友情の声以上に重みのあるものはなにもない。友情がわたしたちに語ることはすべてわたしたちの利益のためであることがわかっているからだ。友人もまちがったことを言うばあいはある、しかし友人はけっしてわたしたちにまちがったことをさせようとはしない、と信じていい。ときには友人の忠告を聞き入れないことはあっても、それを無視するようなことをけっしてしてはならない。」  
 (同書、中巻 p.72)

この事実から道徳や倫理の目覚めに言及するルソーの柔らかな知性は、カントに何よりも欠けているしなやかな部分であることをカントは痛感し



ていたに違いない。けれどもルソーの美しい知性の柔らかな動きに心を奪われる感受性をカントが持っていたことは、カントの道徳論の背景を知るうえで決してむだではない。

本章では都会の自然人が学ぶべきことを確認してきたが、エミールの成長はようやく他者との関係、道徳や倫理と社会性へと導かれてきた。次章で大人の学ぶべきことと社会性の問題を通して、ルソーの教育思想の到達点を考え、それを現代に生かす道を探りたい。

#### 第四章 大人の学ぶべきことと社会性

いよいよエミールは成長し、青年期を迎え、大人として学ぶことを教えられる。ふつう、『エミール』は子ども教育論として論じられることが多く、青年期の教育に話が及ぶことはわずかしかない。けれども青年教育論も、ルソーの倫理観、宗教観、社会観を知るうえで、同様に大切な部分が含まれているので、この部分に焦点を当てて、最終的にルソーが社会をどうとらえていたかを論じ、ルソーの教育思想の射程を踏まえ、その現代的意味を考えることとする。

青年は人文的な学問を必要とする。ルソーはこう述べている。

「人間の心の研究をはじめると、わたしはむしろ個人の伝記を読むことにしたい。そこでは、人間はいくら姿をかくそうとしてもむだで、歴史家はどこへでもついていくのだ。歴史家はその人間に息つくひまをあたえない。見ている者の鋭い目をさけるための片隅をあたえない。そして、その人間がうまく身をかかせたと思っているときにこそ、歴史家はいつそうよくかれを知らせたことになるのだ。モンテーニュは言っている。『伝記を書く人たちは、事件よりも意図に多くの興味をもっているし、外部で起こることよりも内部から出てくることにいつそう興味をもっている』ので、こういう人たちがわたしにはいつそうむいている。だからこそ、あらゆる種類のことで、プルタ

ルコスはわたしにぴったりした人なのだ』たしかに、集合した人々つまり国民の精神は個々の人の性格とはひじょうにちがっているし、人間の心を集団においても検討しないのはきわめて不完全にそれを知ることになる。しかし、ひとびとについて判断をくだすにはまず人を研究しなければならないということ、そして各人の傾向を完全に知る者は、国民ぜんたいのうちに結びあわされたその作用をすべて予想できるということもやはりたしかなことだ。」（同書、中巻 p.86-87）

人文学は人間の心の研究であり、入門者は歴史を学ぶのがいい。けれども、エミールはまず、個人の伝記を読むといい。伝記作家は人間の心をよく観察しているし、事件よりも内側から出てくることに関心を向けている。個々人の心をよく学べば、やがてはその社会の精神も自ずと知れてくる。歴史から人間を学ぶために、エミールはまず伝記をよむべきだとルソーは教える。そして、人の心から社会の精神に触れさせるのがよい。人間に興味を持ち、人間から経験則を引き出すようになると、エミールの視野はより多くのものに開かれてゆく。

「考えれば考えるほどよくわかってくることだが、そういうふうには慈善心を行動に移し、わたしたちの成功、不成功からその原因についての考察をひきだすことになれば、青年の精神のうちに育てていくことのできない有益な知識はほとんどないし、学校で獲得することができるあらゆるほんものの知識のほかに、かれはもっと重要な学問を身につけることになる。それは獲得した知識を生活に役立つことに応用することだ。自分と同じ人間に大きな関心を寄せているかれが、はやくから、人間の行動、趣味、楽しみをしらべて評価することを、そして、人間の幸福に役だちうるもの、害となるものに、だれにも関心をもたないで他人のためになにもしてやらない者よりも、一般的にいつて、いっそう正しい価値をあたえることを学ぶようにならないということはあるまい。」（同書、中巻 p.119）

具体的な人間の心を学ぶことから始めて、心は判断力、知識欲、幸せと不幸せを見分ける力、さらには人類愛や正義への愛といった幅広い倫理観を育ててゆく。そして、ついに宗教というものの基礎をエミールは学ぶことになる。

「人間の権威も生まれた国の偏見もいっさいみとめないかぎり、理性の光だけでは、自然の教育において、わたしたちが自然宗教よりもさらに遠いところに導かれていくことはありえない。だから、そこにわたしはエミールとともにとどまっているのだ。もし、かれがそれとは別の宗教をもつべきだとするなら、この点においては、わたしはもうかれの案内者になる権利をもたない。それを選ぶのはかれがひとりですべきことだ。」  
(同書、中巻 p.286)

では基礎的な宗教心である自然宗教とは一体どのようなものなのか。エミールは何を知り、心の指針とすることを学ぶのか。

「ここではじめてかれは、善良であることに、人々の見ていないところでも、また掟に強制されなくても、よいことをすることに、ひそかに正しくすることに、たとえ生命を犠牲にしても、自分の義務をはたすことに、心のうちに徳をもつことに、ほんとうの関心をみいだす。それは、みんながいつも自分にたいする愛をそれに優先させる、秩序にたいする愛のためばかりではなく、かれの存在をつくった者にたいする愛、自分にたいする愛そのものと溶けあう愛、のためでもあり、さらに安らかな良心と、あの至高の存在者の観照がかれに約束している幸福、この世をりっぱに過ごしたのちにあの世であたえられる永遠の幸福を楽しむためだ。」  
(同書、中巻 p.287)

ルソーはここで、都会の自然人が学ぶべき最小限の宗教の考え方を、私

たちに打ち明けている。倫理の基礎となる、私たちを作った者への愛と、善良な者の死後の幸福を約束するこのうえない高みに居る者を感じて悦びに浸る心である。

ここまで学んできて、エミールは男女の官能を受け入れ、未来の伴侶を探す時期に差し掛かる。先生は来るべき理想の伴侶を仮にソフィーと呼ぶ。先生はエミールと共に旅に出て、理想の恋人ソフィーと出遭わせてあげることになる。夫となるための旅に出たあと、エミールはソフィーのもとへ帰り、彼女の両親の生計を引き継ごうとする。夫婦になってからも恋人同士であることを勧めた先生は、エミールの結婚とともに先生の地位を捨てて、エミールはソフィーの手に委ねられる。

最後に先生がエミールに教える社会の約束中の約束、ルソーの社会契約論がこの本でどう語られているかを見てゆくことにする。

「王を選ぶまえに人民はすでに人民なのだが、社会契約のほかになにが人民を人民にしたのか。だから、社会契約はあらゆる市民社会の基礎となっているのだ。そこで、この契約の本質のうちにこそ、それがつくりだす社会の本質を探究しなくてはならない。わたしたちは、その契約の内容はどんなものか、それはほぼ次の公式で言いあらわせるのではないか、研究してみることになる。『わたしたちはみんな共に、自分の財産、人格、生命、そして自分の力のいっさいを、一般意志の最高指揮にゆだねる、そして、みんなで一緒に、全体の分割できない一部として各自の部分を受けとる』」 (同著、下巻 p.300)

この考えでは、個人は公の法にだけ従い、法は社会的合意を示すものだから、人は法に従いながら、自分の預けた権利に従っているのに過ぎない。ルソーは自然と社会の関係について、決定的な判断を下す。

それゆえ「人は社会契約によって自然状態にあるときよりもいっそう自由になることがわかってくる。」(同書、下巻 p.303)

これによって、エミールは自分の利益を公益と成すことを学ぶ。法律は

自分を支配することを教えるとルソーは言う。一通り社会性の基礎を教えたあとで、エミールは、田園の質朴な生活、人間の最初の生活、いちばん平和で自然な生活を選ぶように勧められる。

社会を自然より善とみなすか、悪とみなすかの問題について、田中未来はこう言っている。

「ひと言でいえば、『人間不平等論』において、あれほど明確に不平等の起源は後の言葉でいう剰余価値の発生とか、私有財産制にあり、そこから支配階級とそれに従属する階級が起こったと説いているのに対し、『社会契約論』では一般意志の支配する、民主主義の体制が人間の自由と平等を取り戻すと説いているのである。」

(田中未来著『エミールの世界』 p.138)

田中未来の結論としては、教育された高次の自然人が、自然状態とは区別された、高次の自然状態を作るという着地点を『エミール』は示しているということになる。(同書、p163)

私のことばで言えば、教育を受けた、都会の自然人が社会契約によって、自分の預けた権利を社会から受け取るのが現実的な望ましい姿だということである。

都会の自然人の学ぶべきことを、発達心理学的な子どもの発見、観察によって説き、子どもの成長過程に応じて、最低限役に立つことを自分で学ばせてゆくことを目指す『エミール』の教育思想は、まず子どもの目線に立って視界が広がって行く喜びを追体験する視点と、先生という十分な資質を持った教育者が、子どものためを思って、世界と社会の成り立ちの基本を慎重に、ともに伴走者となりながら、少しずつ学ぶことを見守る大人の視線の二本柱で成り立っている教育論であり、その中でルソーは社会とは自然より悪かという『人間不平等起源論』と『社会契約論』の間に横たわるみずからの問題意識を、具体的な教え子と先生の対話を想定しながら、掘り下げて行った。

それは、教え子に語るのに恥じない社会と人間の姿を、自ら都会の自然人であろうとしたルソーが、渾身の力を込めて描いた教育思想である。

このなかで、自然状態と社会の足かせというジレンマは、「教育を受けた自然人は、自分の預けた権利を社会契約によって取り戻す」というかたちで出口を見出すことに成功している。その意味で、人間の自由の再定義を求められている高度情報化・管理社会の現代において、『エミール』は教育の目指すべき方向性を、原点に立ち帰って伸びやかな形で考え直すための力強い素描を私たちに与えていると言える。

#### 引用文献

ルソー著『エミール』上巻、中巻、下巻、今野一雄訳、岩波書店、1962、1963、1964

フィリップ・アリエス著『子供の誕生』杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、1980

五十嵐良雄著『J.J.ルソーの教育論』、現代書館、1996

田中未来著『「エミール」の世界』誠文堂新光社、1992

(なお、引用箇所は本文中に示した。)